

ニューズレター 第119号・2021年8月

日本カナダ学会 発行人：佐藤信行 編集人：福士 純・竹中豊・岡田健太郎

事務局：〒162-8473 東京都新宿区市谷本村町42-8 中央大学法科大学院 佐藤信行研究室気付
TEL:080-3868-1941・FAX:03-6368-3646・http://www.jacs.jp・jacs@jacs.jp

(電話等の受付：毎週月曜日10時～12時及び13時～17時 郵便振替口座 00150-2-151600)

第46回年次研究大会のご案内

福士 純

昨年からのCOVID-19の感染拡大は今なお収まる気配を見せず、様々な制約の下での生活が続いています。カナダを対象とする私達の研究活動も、当然のことながら困難な状況に晒され、満足のいく研究に取り組むことが出来ずにいる会員の方々も多いかもしれません。そのような困難な状況の中でも、日々研究を積み重ねてこられた会員の方々の研究発表の場、そして研究者間の学術的交流の場として、今年度の年次大会が2021年9月11日(土)、12日(日)の2日間開催されます。今年度は、昨年度に続いて会場校となる筑波大学筑波キャンパスでの対面での開催の一方、ZOOMを用いたオンライン会議を併用するハイブリッド形式での開催を予定しておりましたが、残念ながら感染状況が悪化してしまったため、急遽オンラインのみでの開催へと変更するかたちで、現在佐藤信行会長、溝上智恵子大会実行委員長、そして大会企画委員にて準備を進めています。

今年度の年次大会では、ヨーク大学のジョディ・バーランド先生 (Professor Jody Berland, York University) に “Funny not funny, here not here: navigating the Canadian in contemporary popular culture” という論題の基調講演をお願いしています。近年高い評価を受ける一方、グローバル化の影響を受ける中で発展と同時に変化を遂げているカナダのポピュラーカルチャーに関して、様々なテレビドラマを事例にお話される予定となっています。なお、バーランド先生はカナダからの渡航制限のために会場にて大会に参加することは出来ませんが、事前に録画した講演の上映、そしてオンラインでの質疑、議論というかたちで年次大会に参加していただきます。

今大会では、5つのセッション(「自由論題」、「カナダの文化表象」、「ケベック文学」、「ジェンダー」、「多文化主義」)の開催を予定しています。中でも、「ケベック文学」のセッションは、日本ケベック学会(AJEQ)との共催となっています。JACSとAJEQの両方に入会して

(次ページに続く)

JACS Newsletter No.119 (August 2021) // 本号の内容：第46回年次研究大会のご案内(福士純)
●自著を語る：『駒形丸事件——インド太平洋世界とイギリス帝国』(細川道久) ●リレー連載：なぜカナダ研究をしているのか(第14回)カナダ、ユーコンの先住民から学ぶ(山口未花子) ●事務局より(第46回年次研究大会のお知らせ、「トラベル・グラント」募集について、『カナダ研究年報』第42号(2022年9月発行予定)の公募要項、会費納入について(お願い))・・・●編集後記

いる会員もいるかとは思いますが、本セッションが JACS のみならず、AJEQ の会員にも公開されることで、より活発な質疑や議論が展開されることを期待しています。

加えて、2 日目の午後に開催されるシンポジウム「図書館とリスクマネジメント」では、溝上実行委員長を中心に企画が進められています。我々も調査の際に利用するカナダの図書館による、現在の COVID-19 を含む様々な問題に直面した際の対応に関する報告を下に、社会における図書館の役割をフロアも含めて改めて見つめ直すことが目指されます。

今年次大会は、様々な制約の中で開催されることにはなりますが、昨年が続いてオンラインでの参加が可能となっていることは肯定的な面もあります。それは、今まで国外を含む遠方に居住している、ないしは様々な理由で大会会場に来られなかった会員の方も参加、報告が可能となったことです。事実、昨年はオンラインでの参加を含めると、それ以前の年次大会よりも多くの会員の方が参加しており、今回の年次大会では国外から研究報告をされる会員もいらっしゃいます。対面での開催が出来なくなってしまったことは残念ではありますが、オンラインでの積極的な参加を期待しております。

(第 46 回年次大会企画委員長・岡山大学)

* * *

< 自著を語る >

秋田茂・細川道久『駒形丸事件——インド太平洋世界とイギリス帝国』(ちくま新書、2021 年)

細川 道久

「コマガタマル」って、日本の船?? ——カナダ史を学び始めた約 40 年前からずっと気になっていた。「駒形丸事件」を調べ出したのは、2005 年。滞在していたヴァンクーヴァーで、Ali Kazimi のドキュメンタリー映画 *Continuous Journey* (2004 年制作) を観る機会があった。

ヴァンクーヴァー美術館では、駒形丸の「黒船」が、先住民のロングボートの「赤船」、ジョージ・ヴァンクーヴァーの「白船」、中国福建省から移民を運んできた「黄船」とともに建物上部に据えられているのを観た。Ken Lum の作品 *Four Boats Stranded: Red and Yellow, Black and White* (2001 年制作) である。映画も「黒船」も印象的だったが、それとくらべて、ポータル・パークにある「駒形丸事件」の小さな銘版は薄汚れていて、なかなか見つけられなかった記憶がある。おそらく当時は、「駒形丸事件」はカナダ人に広く知られた出来事ではなかったように思う。

だが今日、「駒形丸事件」は、カナダ人が共有すべき記憶として認知されつつある。2012 年には、コールハーバーに「駒形丸メモリアル」が建立され、2016 年にはジャスティン・トルドー首相が議会で謝罪した。そして、本年 5 月には、ヴァンクーヴァー市が駒形丸来航の「5 月 23 日」を「駒形丸追悼の日」とすることを宣言した。

そもそも「駒形丸事件」とは、どういった出来事なのか。《1914 年、駒形丸に乗ってヴァンクーヴァーに到来したインド人移民が上陸を拒否された事件》で片づけられる話ではない!! ——インド人移民たちは、なぜ／どのようにして駒形丸に乗ってヴァンクーヴァーにやってきたのか。なぜ彼らは上陸できなかったのか。上陸を拒否された彼らは、その後どうなったのか。「駒形丸事件」は、カナダとインドの問題にとどまらない。イギリスや日本、香港やシンガポールなどにも広く影響が及び、様々なアクターが関与している、しかも、事件は第 1 次世界大戦勃発前後に起きている (1914 年 4 月の香港出航から、同年 9 月のバッジ・バッジ騒乱まで)。また、今日のカナダやインドでは、「駒形丸事件」はどのように記憶されているのか、等々——史資料を読み進めるうちに、「駒形丸事件」は、カナダ移民史のひとつコマとしてではなく、様々な角度からアプローチできる／しなければならないテーマだと思うようになった。

そうしたなか、大阪大学の秋田茂教授と「駒形丸事件」を研究する機会を得た。秋田氏は、日本におけるグローバルヒストリー研究の第一人者であり、国際的にも知名度が高く、精力的に研究プロジェクトを推進されている。英領インド史研究から出発された秋田氏は、アジアからのイギリス帝国史やグローバルヒストリーを追究し、「借り物」ではない、つまり、外国の研究者の受け売りではない歴史研究を世界に向けて発信されている。

「駒形丸事件」をインド太平洋世界の歴史のなかに位置づけられるのではないか。「駒形丸事件」というリージョナルな事件を題材にグローバルな歴史が描けるのではないか——秋田氏のアイデアに、私は諸手を挙げて賛成した。かねがね私は、カナダの歴史をカナダという空間に閉じ込めず、イギリス帝国や北大西洋世界など、より広い世界の歴史と結びつける——「カナダ史を開く」——こと、もっといえば、カナダ史とグローバルヒストリーの接合の必要性を感じていたからである。この点に関しては、拙

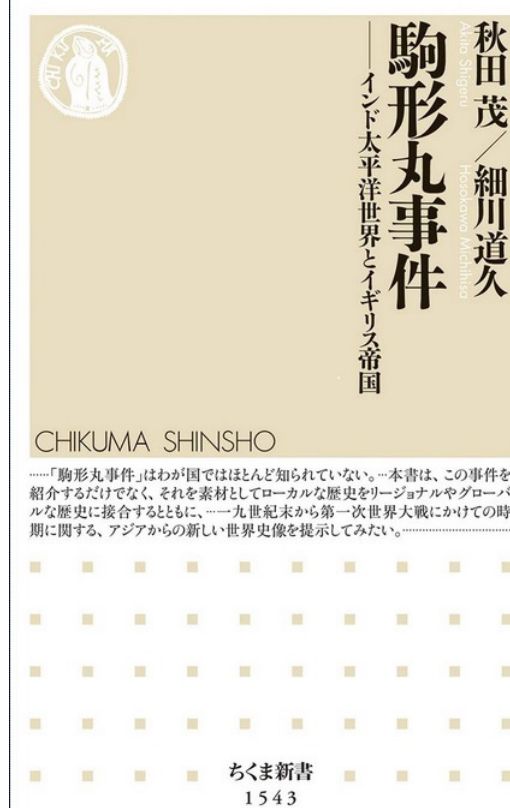
著『カナダの自立と北大西洋世界——英米関係と民族問題』刀水書房、2014年、拙稿「グローバル時代のカナダ史研究」『カナダ研究年報』37号、2017年9月、のほか、2013年9月のJACS年次研究大会シンポジウム（神田外語大学）、などでも披瀝してきた。かくして秋田氏との共著執筆は願ってもない機会となった。

また、2019年6月には、オタワの国立美術館で、「駒形丸事件」を題材としたKazimiの3D映像作品Fair Play(2019年カナダ総督賞ヴィジュアル&メディア・アート部門受賞作品)を鑑賞した。制作風景のビデオも何度も視聴し、大いに刺激を受けた。

「ミクロな視点からグローバルな歴史を総合的にとらえる」——これが本書の「売り」である。「駒形丸事件」を通して、19世紀末から第1次世界大戦にかけて、カナダを含むインド太平洋世界がヒト・モノ・カネ・情報のネットワークを介していかに密接につながっていたのかをわかりやすく解説した。また、今日では極度に細分化している歴史研究だが、政治史、経済史、移民史、社会史などを分野横断的につなぐ総合化も試みている。なお、「インド太平洋世界」とは、アジア世界とアメリカ大陸からなる「アジア太平洋世界」に、南アジアや南アフリカなどを含めた「環インド洋世界」を加えた広域世界である。こちらの方が、「アジア太平洋世界」よりも歴史の実態に即しており、地域的なつながりを理解するのに有効な枠組みである。

新書という形で世に問うたのは、歴史研究の醍醐味を、「つながる歴史」の面白さを、一般読者の方々にも伝えたかったからである。高校生や大学生の初学者にも読みやすいよう、できるだけわかりやすく、臨場感が伝わるような執筆を心がけた。

「あとがき」で秋田氏が記しているように、2022年度から高等学校の地理歴史科は大きく変わり、「世界史」に代わる必修科目として、世界史と日本史を統合した「歴史総合」がスタートする。「歴史総合」の目標は、「問い」



を立てて歴史を考察する課題学習や、歴史学習と現代世界が直面する諸課題とのつながりの解明など、従来の歴史教育では軽視されてきた学習目標も掲げられている。本書は、「日本史と世界史がつながる」という、まさにグローバルヒストリーの魅力を「駒形丸事件」を題材として描いている。

最後に、カナダ研究との関連でひと言。「世界史」ではカナダの歴史はほとんど扱われてこなかった。だが、「世界史」に代わる「歴史総合」の登場は、「グローバルヒストリーの申し子」(本書 57 頁)であるカナダの存在をアピールするチャンスではないだろうか。本書は、そのささやかな一歩である。是非ともご覧いただき、忌憚のないご意見を頂ければ幸いである。(鹿児島大学)

* * *

＜リレー連載＞

なぜカナダ研究をしているのか (第 14 回)

カナダ、ユーコンの先住民から学ぶ

山口未花子

はじめに明かしておく、私はもともとカナダ研究を志していたわけではなかった。私が研究したいもの、それは昔から変わらず「動物」であった。動物と聞けば普通は生物学で学ぶもの、と考えるだろう。その例にもれず私も大学の学部時代は動物生態学を専攻していた。しかし、フィールドで出会う動物たちとの触れ合いや、ユニークな生態を知る面白さを感じながらも、一方でもっと多面的な動物の姿というものがあるのではないかと思うようになった。例えば一つの種だけみるのではなく、種と種の間をみることにしてみたかったが、動物生態学の世界ではその種間関係に「人間」を入れることはできなかった。また、生物学以外の視点、例えば認知科学や文学、アート、宗教といった側面からも動物を知ることは可能なのではないかという思いもあった。その意味で人類学ならば、問題設定を工夫すれば人と動物との関係、について、生態学的なものも含めて様々な観点から動物について研究

することが可能になる。

こうした経緯で大学院からは文化人類学に転専攻したのだが、この時もまだカナダでの調査が決まっていたわけではない。ただ、人類学の方法で動物に迫るために、フィールドの選定にはいくつかの条件をクリアすることが必要とされた。まず一つ目は狩猟採集文化を現在もある程度維持していること。100%生業手段を狩猟採集のみに頼っているようなコミュニティは現在地球上にはほとんどないかもしれないが、やはり人間の最も初源的な動物との関係を明らかにするためにも重要な条件である。もう一つは北方であること。これは同じ狩猟採集文化でも、南方の場合植物への依存度が高くなるのに対し、イヌイットの例を引くまでもなく北方では動物資源への依存が高くなる。特に食、という点に関しては、亜極北より北では穀物や根菜類など身体を維持するのに必要な栄養を賄える植物が生育しないため、自然と動物が主食になる。

こうした条件に照らし合わせてみたとき、北米の先住民コミュニティでの調査はとても魅力的だった。二つの条件に合致すること、特に北米はユーラシアの北方と比べても動物飼育がヨーロッパからもたらされるまで行われなかったということ、そしてもちろん多様な動物が暮らす豊かな自然があることがその理由である。また、北米北方という意味ではアラスカでもよかったのだが、カナダとアラスカでは先住民と国との関係が異なっており、特に狩猟採集活動に係る土地に関する権利はカナダのほうが認められていることは大きな魅力だった。たとえばカナダのユーコン準州では、先住民の権利として、自家消費を目的とする狩猟のために、いつ、どこで、どんな種の動物をどれだけでも獲ることができるが、アラスカではここまでの権利は認められておらず、ライセンスの取得や狩猟期間の制限などがある。さらに現実的な問題として、大学院で師事した指導教員がカナダで先住民研究をおこなっていたということもあった。

こうしたカナダの北方で先住民の人たちから

動物について学びたい、という気持ちが固まったものの、一つ難しかったのは実際具体的にどの場所で誰を対象にして調査をするのかということだ。指導教員が調査したのは数十年前のことだったから、私が調査を始めようとした時とは状況が異なっている。また、カナダは先住民の権利がかなり認められているということは、裏返せば先住民を対象とした調査をするためのハードルが高いということでもある。私が調査を始めようとしていた2000年代初頭、日本の文化人類学会のなかで正式な調査許可を取得することは今ほど一般的ではなかった。しかしカナダでは当時すでに、調査ライセンスのシステムがあり、先住民の自治組織及び州政府の許可がなければ調査に入れなかった。その許可をとるためには自分の研究が倫理的に問題ないこと、先住民コミュニティに負担をかけないこと、調査成果の還元なども誠実に行うことなどを説明したうえで承認を得る必要があった。しかもその許可をとるためにメールや電話で連絡してもなかなか返事がない。というのもその当時北方のコミュニティではインターネットはあまり整備されておらず、会議や狩猟などで街を開けることが多いチーフを捕まえるのは困難だった。それにもし電話で話せたとしても、自分の気持ちが伝わるだろうか？という不安もあり、事前調査のために滞在していたアルバータ大学から、ユーコン準州の先住民コミュニティへ赴き、いくつかの集落に滞在して何とかチーフを捕まえては話を聞いてもらった。そうしてやっとここで調査しても良い、という許可をくれたのが今も私のフィールドであるワトソンレイクの先住民コミュニティだった。

もしかするとこれから文化人類学を学びたいと思う人には、調査を始めるためにそれほどのハードルがあるのかと思われてしまったかもしれない。現在であれば、インターネットを使って調査の交渉をすることが可能になっている分、少しは楽になっていると思う。しかし当時の私はどうしてもここで調査をしたいという想いを日々強くしながら、目の前の課題に取り組んでいたら

何とか道が開けたという感じだった。その当時の私の気持ちを支えてくれたもの、それは訪れるたびに驚かされる、自然の美しさ、豊かさ、そして多くの動物に出会えるユーコンという土地の持つ魅力だったと思う。

その後、コロナや出産などで行けない期間があったものの、現在に至るまで15年同じ場所に通いつけているのも、ユーコンという土地とそこに暮らしてきた人々、そして動物たちの織り成す世界に強く惹かれているからだ。その意味で、今はカナダで研究するというに大きな魅力と意味を感じている。特に、北方の森の中で現在に至るまで受け継がれてきた動物と人が同じ森に暮らす隣人のような互酬的な関係は、人と動物が初源的には社会関係を結べるほど近い存在であったことを示す重要な事例である。

実はそうした動物や自然とのつながりは、日本の都市部で暮らす私たちの心の底にも本来存在しているはずのものである。人新世とも呼ばれる今日の世界において、そうした自然とのつながりを再考することは、環境問題やコロナの流行がなぜ起こっているのかということにもつながる、重要なことであり、今まさに必要なことではないだろうか。こうした点も含め、これからもカナダと日本を往復しつつ、人がいかに自然とともに世界を作ることができるのかを考えていきたいと考えている。

(北海道大学)

* * *

((事務局より))

◆第46回年次研究大会のお知らせ

2021年度の日本カナダ学会(JACS)第46回年次研究大会は、2021年9月11日(土)・12日(日)に、ZOOMを用いたオンライン大会の形で開催致します。昨年来、筑波大学関係者のご協力の下、対面とオンラインの併用による開催のための準備を進めておりましたが、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の急速な拡大に鑑み、これを断念するに至りました。会員の皆さまには、事情ご賢察の上、ご容赦いただきますようお願い申し上げます。プログラム・報告要旨集は、近日中

に当学会 HP 内にて発表致します。

◆「トラベル・グラント」募集について

2021 年度 (2021 年 4 月 1 日～2022 年 3 月 31 日)までの間に、カナダおよびカナダ以外の国(日本を除く)で開催される国際会議などでカナダ研究について報告をする本学会会員に旅費一部補助の制度です。本学会会員によるカナダ研究の成果を広く海外に発信し、研究の交流や国際化を図るのが目的です。ただし、トラベル・グラントは旅費の一部を補助するのが趣旨ですので、旅費のすべてをカバーするものではありません。募集要項は次のとおりです。(1) **支給人数と支給金額**：1 名につき 5 万円・最大 2 名。(2) **支給対象者**：募集時点において日本カナダ学会会員であること。原則として、専任の勤務先を持たない会員。専任の勤務先を持つ会員でも応募出来ますが、優先度は低くなります。(3) **応募書類**：①本学会所定の応募用紙(日本カナダ学会のホームページに掲載)、②国際会議などでの報告が正式に受け入れられたという文書(メールも可)、③出張に関する費用(航空運賃、滞在費、参加登録料など)の見積書。(4) **出張後の義務**：①帰国後 2 週間以内に報告した論文を、郵送にて学会事務局に提出すること。②出張に関わる費用の報告書(学会ホームページ掲載の所定の書式)。(5) **その他の事項**：①当該年度内でトラベル・グラントの予算額(10 万円)が満額執行されなかった場合でも、原則として、残額を次年度への繰越は行いません。②出張期間は当該年度内に終了しなければなりません。③このグラントを支給された会員は、原則として再度応募することはできません。(6) **審査方法**：日本カナダ学会理事会における審査機関(対外交流・社会連携委員会)により事前審査を行い、それぞれ 5 月および 9 月の理事会にて最終決定します。(7) **応募締切日**：2021 年 4 月末日(締切済み)および同年 8 月末日(年 2 回)。(8) **提出先**：〒162-8473 東京都新宿区市谷本村町 42-8 中央大学市ヶ谷キャンパス佐藤信行研究室気付日本カナダ学会事務局宛。(9) **問い合わせ**：電

子メールにて事務局まで。

◆『カナダ研究年報』第 42 号(2022 年 9 月発行予定)の公募要項

(1) **未発表の完全原稿のみ**(採否の決定はレフリー制による)。(2) **原稿の種類**：「論文」(邦文 40 字×40 行×12.5 枚相当以内;英仏文 16 語×25 行×20 枚相当以内);「研究ノート」(邦文 40 字×40 行×8 枚相当以内;英仏文 16 語×25 行×12.5 枚相当以内);「書評」(邦文 4500～5000 字)いずれも横書き、図表、注、文献リストを含む。(3) **締切**：2022 年 1 月末日必着。(4) **執筆要項及び投稿用表紙**：JACS ホームページに掲載。(5) **原稿送付先**：〒277-8687 千葉県柏市光ヶ丘 2-1-1 麗澤大学 田中俊弘宛(郵送)、あわせて ttanaka@reitaku-u.ac.jp (メール添付)まで。

◆会費納入について(お願い)

現在会費の納入を受け付けております。また、前年度までの会費を未納の方は、直ちに納入下さい。過去 3 年分(当該年度を含まず)の会費が未納の場合、学会からの発送物停止等をもって会員資格を失うこととなりますのでご注意ください。一般会員：7,000 円・学生会員：3,000 円(学生会員は、当該年度の学生証のコピーを提出のこと)。郵便振替口座：00150-2-151600。加入者名：日本カナダ学会。他金融機関からの振込の場合は、口座番号：ゆうちょ銀行 〇一九(セロイチキュウ)店 当座 0151600 ニホンカナダガツカイ。来年度以降、自動振替に移行希望の方は事務局までご連絡ください。必要書類をお送りします(自動振替による口座引落は 7 月です)。ご協力願います。なお会員区分の変更のある場合は直ちに事務局までお知らせ下さい。

* * *

★編集後記……収束までに数年はかかるだろうと言われてはいたものの、ここまでコロナ禍がわたしたちの日常に大きく影を落とす状況が続くとはあまり想像していなかったような気がします。残念ながら本年度の研究大会もオンラインによる開催へと変更になりました。一日もはやく日常が戻ってくることを願ってやみませんが、しかしオリンピックを見ながら思うのは、かつての日常がそのまま戻ってくるのが果たしてよいのかということだったりもします。(0)